

ヨセミテ溪谷で考えたこと

金光正次



今年の夏、ワシントンで開かれた医学会議に出席したついでに、米国とカナダの国立公園をのぞいてきた。日限の制約からどこもあわただしい旅であったが、それでも国立公園の施設や運営について、教えられるところが少なくなかった。あまり範囲を拡げると話が散漫になると思うので、ここではヨセミテ国立公園での見聞をもとにして、私が考えたことを述べたい。

この公園はシエラ・ネバダ山脈のヨセミテ溪谷とそれをとりまく山群からなり、サンフランシスコから一日行程のところにあるので、訪れる人もはなはだ多い。景観の特徴は氷河期に深く削られたU字型の溪谷と、それにかかる大小の滝、セコイアの巨木などで、車道にはクマの群も出没する。溪谷の下流は岩石ばかりで荒涼としているが、公園区域にはいると谷間は美しい針葉樹の林におおわれ、溪流は淵をなし、池を

湛えて氷河に削られた絶壁を映している。中でもハーフ・ドームと呼ばれる巨大な岩峰が頂から縦にたち割ったように削られ、高さ約千mの岩壁となって聳立するさまは壮観である。

私達はホテルの予約を怠ったために部屋がとれず、どんなところでもよいからと頼んだら、天幕ならあるといわれた。しかたがないので覚悟を決めてついて行くと、溪谷の一番奥にあるカリービレッジというところに案内された。

天幕といっても、鉄骨の枠の上にはタタミ四畳くらいの広さの半固定式のもので、床も地面から1mほどの高さにはられ、中にはベッドが二台と小物ダンスが置いて

ある。これと同じ様式のものがある。これが百戸ほど、それに木造のケビンが五〇戸ほどが加わって、この村が造られて

いる。別棟に男女別の水洗便所とシャワー室、カフェテリア、管理事務所、読書室、野外舞台などが設けられ、どの建物も簡素で周囲の環境とよく調和している。食事はカフェテリアでとるようになっており、自炊は許さないが、ケビンに泊る人は必ずしもそうではないらしい。食事の価格は都市よりやや高いが、質のほうは変わりない。自炊したい人は近くの野営場に行く。ここには水道、水洗便所、炬、野外舞台などが備わり、牽引式や積込式の移動ケビンが林間に散在している。

ヨセミテの溪谷にはこのような天幕村や野営場が十カ所以上もあり、それにホテルやロッジを加えると、収容力は数千人に達

すると想像される。夏が最盛期というから、私が訪れたころはそれくらいの人数が住んでいたと考えてよいだろう。それが少しも気にならないのは溪谷が広いこともあが、来園者を希望や条件によって区分し、適当な距離をおいて完備した区域に分散収容しているためと思う。

施設についてももう少し付け加えると、便所の数は多すぎるくらいあるし、シャワー室には熱湯が出て、湯上りタオルも用意してある。外出中にベッドまでが、ホテルなみに整頓されていたのは意外であった。それで、一日分の料金は六ドル五〇セントである。米国の物価からすると一ドルは百円くらいに値うちしかないから、米国人には一人三百円という安さである。この村には若者に混って老人夫婦が幾組か暮らしていたが、みな嬉しそうに生活を楽しんでいる様子だった。

谷間には自動車道路が縦横に通じ、天幕村や野営場を結ぶバスも走っている。行き交う車は多いが、少し道路をそれると樹林にさえぎられて音も聞こえない。谷間はこのように便利だが、両側を五百m以上の高さの絶壁で囲まれているので、その上に登るのは大変である。道路は溪谷を登りつめるものと、公園の入口まで戻って、そこから尾根にとりつくと二つしかない。だから、わが国の観光地では普通の眺めになっている山腹を生々しく切り裂いたような道路は、ここでは見られない。

私達が着いた日の夜、八時すぎに音楽が聞こえて、その方向に人々が集まってゆく様子であった。私もついて行くと、村の中央の野外舞台の前に人だかりしていた。ノド自慢か、映画でもやるのかと思ったところ、レンジャーの制服を着た若い男が現われて挨拶をはじめた。

これから幻灯で、ヨセミテの自然を紹介するといふのである。照明が消え、スクリーンに天地創造のころの幻想的な画面が映ると、彼はヨセミテをこのうえなく愛したミュージアの詩を朗読しはじめた。画面は火山の爆發、地震、煮えたぎる大洋、洪水、隆起する大陸と移ってゆき、それに合わせて抑揚ゆたかに朗読がつづく。詩が終わるとスクリーン一杯に大水原が現われ、説明

は氷河期の科学的な話しに変わった。水が動き出してヨセミテの谷を削り、氷河が後退した跡は湖になり、それが次第に乾燥して現在の谷間になるまでの経過が美しいスライドで示され、見る者を飽かせない。説明もなかなか雄弁である。

現代の部にはいるとヨセミテの四季、動植物とその生態、ハイ・シエラ(シエラ・ネバダの主脈)の風景などが紹介され、終わりに近づくころには汚された野営地の跡、岩に書かれた落書、野生動物にいたずらをする観光客などが映り、レンジャーは声を強めて公德心を訴える。清掃してから出発せよ、草木を採るな、野生動物に餌を与えない、などの注意がそれにふさわしい画面とともに呼びかけてくるので、この演出はなほだ効果的である。話しの内容がかなり高級なのに、子供も老人達も終わるまで席を立たず、静かに耳をかたむけていた。

この幻灯会が終わった後で、このレンジャーにいろいろ質問してみた。

私 この公園には何人のレンジャーが配置されているか。

レンジャー クマをはじめいろいろ危険があるが、もっとも危険なのは人間だ(この珍問答は、私がレンジャーといつたのをデンジャーと聞きちがえられた

ためであるが、はしなくもこの問答からここでも自然破壊の元兇が、人間であることを知ったのは収穫であった)。

レンジャー 前言を訂正する。夏の間は、この区域だけで百人くらいが配置されている。

私 そのレンジャーは、すべて定数化されているのか。パートタイマーもふくめてか。また、その給料はどこから支出されるか。

レンジャー 大多数は、夏だけ臨時にやとわれたパート・タイマーである。しかし、彼らもわれわれと同様に、州政府から給料をもらっている。ただし給料が安いので、この仕事が好きでないと長くは勤まらない(彼はロスアンゼルス大学の物理科を出て、去年からこの職についたという)。

私 今晚のような幻灯会は、ほかの野営場でもやるのか、また話しの内容が、聴衆に対して少し高級だと思いがどうか。

レンジャー しっかり。われわれは自分に得意な項目(地学、生物、歴史など)をもっているの、交代で天幕村、野営場、ホテルの中庭などでこのような催しをやる。映画を映すこともある。この会は自然とモラルの教育が目的だから、話しのレベルを下げることはしない。

私 こんなに大勢の人が天幕などで生活していると、たまには盗難などもあるだろう。夜間のパトロールをしているか。

警官 (かたわらで私達の会話を聞いていたが、答を引きとって) 盗難は一夏に一回あるかなという程度だ。悪いことをするのはみな若者で、すぐつかまっている。だから、とくに夜間のパトロールはしない。

私 公園の中は大変清潔だが、定期的に掃除するのか。広いから大仕事だと思いが。

レンジャー 溪流や道路の清掃は公園がする。天幕村には専属の掃除夫がいる。野営地が清潔なのは公園内でのゴミ焼きを禁じているので、キャンパーはゴミを車に積んで帰って行くからだ。同じ場所でもキャンプをすると、他人が見ているから汚さないものだ。しかし、さきほどスライドで見たような不心得者もいる。

私 水洗便所が大変多い。これは公園を清潔に保つのに重要な施設と思うが、便所からの排水はどのように処理しているか。

レンジャー こういう施設は多いほどよい。自分は専門家でないからわからないが、排水を公園の中の溪流に流すことはしてはいないと思う(この質問に答えて

くれる人を探したが、滞在中、その人に
会えなかったのは心残りである。

公園の中を歩いていると、褐色の地に緑
の立木と雪山をあしらったレンジャーの腕
章をつけた人によく逢う。若い人もいるが、
初老の年令の人も少なくない。セコイアの
林で昼食をとったとき、となりのテーブル
に座ったレンジャーも柔和な顔に、白い口
ひげをたくわえていた。公園の中で一番立
派なヨセミテ・パークロッジの売店にはい
ったら、本の売場に最近定年退職した老レ
ンジャーがかいた「ヨセミテの百年」とい
う本が、シエラ・クラブの自然史の本と一
緒に並んでいた。こういうことを考え合わ
せて、私は米国の自然保護におとらしき
を感じた。

その仕事に携わる人に、初老が多いから
ではない。ここには自然を溺愛する偏狭さ
がない代わりに、目ざわりな営利主義も、
神経をいらだたせる騒音もなく、誰もが自
然そのものの中にひたりながら休息し、思
索し、あるいは身体を鍛錬している。この
ような環境の価値は、自然をべった生活の
体験者でなければ理解できないだろう。そ
してここには、一生をその環境の保持に捧
げてきた人がたくさんいる。以上のような
意味で、私はこの国の自然保護におとら
しきを感じたのである。

ヨセミテ程度の施設は、その気になれば
わが国でもつくれないことはない。実際に
箱根のケープルカーや湖上の遊覧船などを
見ると、ここよりもカネがかかっているの
ではないかと思う。しかしそのカネのほと
んどは観光業者の出資で、その事業が自然
保護と逆行する場合でも、政府や地方自治
体は予算の不足などを理由にして、それを
許してきた。これは物事の分別が、まだで
きていない子供の感覚にひとしい。

さきにレンジャーが述べたように、国立
公園はいこいの場であると同時に、自然に
ついて学ぶ場でもある。この後に訪れたカ
ナダのパンプ国立公園に、ジョンストン峽
谷というところがあった。峽谷に通じる山
道を歩いて行くと、路傍に小鳥の巣箱のよ
うなものがおいてあって、その中に便箋一
枚くらいのお紙に書かれた案内書がいてあ
り、自由にもらえる。その紙には「水平に
かさねた山ひだを見なさい。このあたりは
昔、海底だった」「道端の苔は特殊の種類
のものである。それは湿地を好む。苔と一
緒に生えている植物も同じ性質をもつ」な
どと、この峽谷の地学、植物、動物が視覚
的に記され、大変理解し易い。

私はこれと同じことを、近くのルイズ湖
畔でも経験した。この湖はテンブル、ピク
トリアなどの一万一千呎を越える山岳に囲

まれ、カナデアンロッキーの中でも屈指の
景勝地である。夕食の後で湖畔を散策して
いると、ここにも案内の紙をいれた箱がお
いてあった。それには、つぎのようなこと
が書いてあった。

十九世紀の末頃、一人の英国人がインデ
アンを伴って、この湖から流れ出る川を遡
っていた。そのとき、落雷に似たごう音を
聞いた。インデアンは「小さな魚が住む湖
の神様がつぶやいている」といった。この
言葉から彼は上流に湖があることを察して
遡行をつづけ、この湖を発見した。彼が聞
いたごう音は、ピクトリア山の岩壁に押し
出した氷河が、その重さに堪えかねて崩壊
した音であった。いまでも夏の午後には、正
面に見える断崖の上の水が崩壊するのを見
ることが出来る。ルイズ湖が夏に緑色に濁
っているのは、氷の解け水が氷河で削られ
た岩石の微細な粉末を湖に流し込み、それ
が日光を反射するからである。秋になると
解水がやむために、水が澄み、湖はアイ色
に変わる。

この湖にまつわる伝説、雑見の経緯を氷
河の運動にからませて解説しているのは、
心憎いばかりである。わが国の博物館では
陳列物の解説に、どうしてあのようなむつか
しい文句をならべて興味をそぐのだろう。

以上、想い出すままに私の感じたことを

述べたが、言葉の壁や皮相な観察から誤つ
て理解した点もあるかも知れない。しかし
私は、今度の旅から自然保護が容易ならぬ
大事業であり、その基本理念や実施計画は
もちろん重要であるが、現場にあつて、それ
を遂行するレンジャーの職務の重大なこと
を改めて痛感した。さきに述べたように、
日本の自然保護はまだ幼児期にある。これ
を成長させるには保母であるレンジャー
に、おとなの自然保護を見せる必要がある。

その意味で私は、北海道の自然保護に携
わっているレンジャーを短期間、交代で米
国西部の国立公園に留学させることを提案
したい。西部をえらんだのはヨセミテのほ
かに、レーニア、オリンピックなど北海道
と同じ山岳性の国立公園が集中しているか
らで、日本から近いために費用も安くあが
る。道では英語教育、農事研修、日米親善
などのために、毎年多数の青年を米国に派
遣している。自然保護の重要性とわが国に
おけるそのおくれを理解するならば、レン
ジャーの研修もそれに加えるのは当然であ
らう。彼らの所屬や身分などのことで道費
による海外研修に問題があるかも知れない
が、そんなことでこの提案が沙汰やみにな
るなら嘆わしいことである。北海道の自然
保護に筋金をいれるために、その実現を道
当局に強く希望したい。(札幌医大教授)